

穿孔性害虫被害材の被害程度推定調査

平成16年度（国：現地適応化試験）

野々田 稔郎

県内産材の中に、穿孔性害虫に起因する変色等の被害材が見られ、製材品の商品価値を低下させることから問題となっている。この問題を複雑にしているのは、丸太や粗挽きの段階で、被害痕が観察されても、材内部の変色等の被害が、軽微なものか、広い範囲に及ぶのかといった推定が困難なためである。このことから、丸太、粗挽きの段階で、観察される被害痕と材内部に広がる変色等被害範囲の関係を調査した。

1. 方法

穿孔性害虫被害がみられるスギ柱材（135 × 135 × 3000mm）20本を対象に、材表面に表れる被害痕の面積を測定した後、カットソーで切断し、材表面の被害面積と材断面の変色面積及び材断面の変色深さの関係、材表面の被害長さとも材断面の変色深さの関係について測定した(写真-1)。

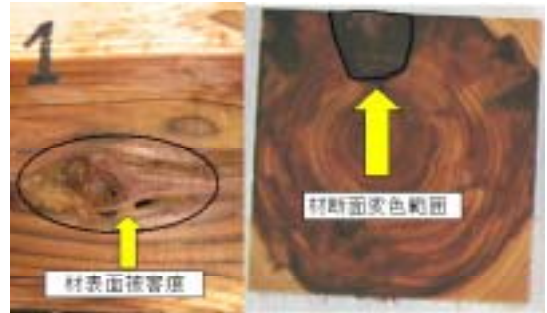


写真 - 1 . 材表面及び断面の被害状況

2. 結果

材表面の被害面積と材断面の変色面積の関係を図-1に、材表面の被害面積と材断面の変色深さの関係を図-2に、材表面の被害長さとも材断面の変色深さの関係を図-3にそれぞれ示した。

これらの図によれば、材面被害面積及び被害範囲長と材内部の被害面積及び長さとの間には、ある一定の関係が認められず、材表面に表れる被害痕に関係なく、一様に材内部の被害範囲が分布していることから、材表面の被害状況から材内部の被害程度を推定することは難しいものと考えられる。

今後、これら、穿孔性害虫被害材の有効活用を考える上においては、これら材内部に広がる変色等の被害が最大でどの程度広がる可能性があるのかを明確にした上で、強度等に及ぼす影響を把握する必要があるものと考えられる。

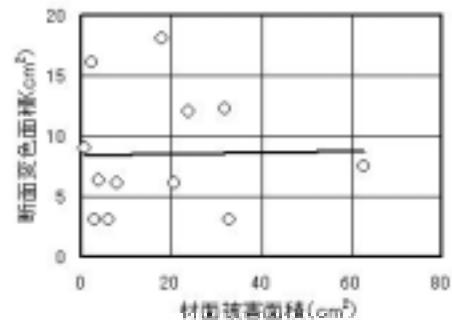


図 - 1 . 材面被害面積と断面変色面積

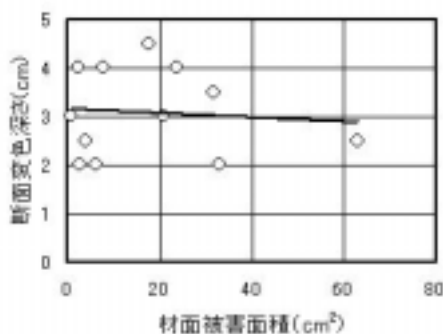


図 - 2 . 材面被害面積と断面変色深さ

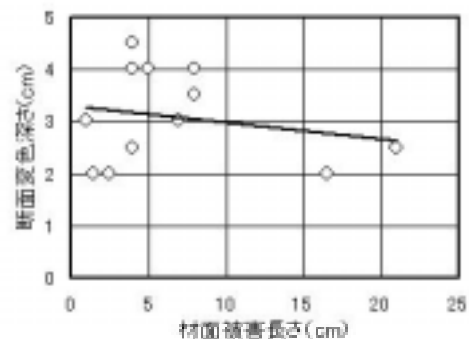


図 - 3 . 材面被害長さとも断面変色深さ